HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高橋裕史著「イエズス会の世界戦略」
Author(s)	平井, 上総
Citation	基督教學, 42, 37-41
Issue Date	2007-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46713
Type	other
File Information	42_37-41.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書評

高橋裕史『イエズス会の世界戦略』（講談社、二〇〇六年）

平井上総

本書は、イエズス会に関する研究や史料翻訳等に従事してこられた高橋裕史氏が、イエズス会の成立から一七世紀初頭までを範囲に、同会による対外布教戦略の実態を多面的に明らかにしたものである。タイトルが示すように本書は日本以外の地域への考察も多分に含んでいるが、同会の活動は当時の日本にも影響を与えており、その実態を世界的な戦略から解明しようと試みた本書は、同時期の日本を対象とする研究にも少なからざる意義を持つものといえよう。それでは、以下、日本史を専攻する者の立場から、内容を紹介させていただくこととしたい。

本書は、イエズス会創立に関わる状況説明・過程を概説した第一・二章と、会の活動の実態を詳述した第三章以後の、二つの部分から成っている。まず第一章「キリスト教とインド世界――イエズス会進出の前史」では、ポルトガルによるインド大陸進出が、カトリック布教と一体化した「国家的プロジェクト」であったとの説明から始まり、キリスト教宣教師にとってのインド観、現地住民観が説かれている。第二章「イエズス会――創立とその組織」では、イエズス会創立の経緯や、その特徴および組織構造について概説されている。特に、『イエズス会会憲』の成立過程を詳述しており、本書の議論の前提としての位置を占める章となっている。

第三章「地上の王と神の使者――俗と聖の饗宴」では、イエズス会とそれを支援する立場にあるポルトガルの関係について述べられる。イエズス会の活動はポルトガルの国益と密接な関わりを有しており、それは教団としての純粋な活動から離れ「世俗化」していたと評されるが、本章ではその理由を、ポルトガルによる同会への保護・援助と、それに付随する奉仕義務の存在によって説いている。

第四章『『情報』の収集・解析とイエズス会」では、

イエズス会が布教地の情報を書簡や年報等によって収集していた事実と、その実践としての布教戦略が述べられる。イエズス会は日本の各地域に対し一様に対処したのではなく、下（肥前・肥後）・豊後・都の三地区を活動の拠点とし、各地区に対応した独自の布教戦略を敷いていたことが明らかにされている。

続く第五章「『異文化』への処方箋」では、イエズス会員が日本への布教に際して採った適応主義政策について論じられる。著者はここで、比較的初期からザビエル、トーレス、ヴィレラらが適応主義的行動を取っていた事実と、日本以外の国でも行なわれた事実を指摘し、ヴァリニャーノによる日本への導入を重視してきた従来の議論に対し訂正を促している。また、同宿（教会で奉仕に従事する日本人）に青色の着物を着用させるように規定していたことに着目し、それがキリスト教で三位一体の象徴となる色であったことから、教会側と摩擦を引き起こしていた彼らにイエズス会員の末端に連なる一員としての自覚を持たせるために採用されたものと指摘する。

第六章「神の使者たちの『錬金術』」は、イエズス会の経済状況をめぐる考察を中心に構成されている。イエズス会の布教はポルトガルの世界進出と分かち難く結びついていたが、その支援は不十分であり、そのために会の活動が停滞する事態も懸念されるようになっていた。そこでイエズス会は他の定収入の確保を目指すようになるが、本章ではその実態について多くの事例を収集し、喜捨、土地・家屋の賃貸、貿易など、多様な収入源があったことや、それは『イエズス会会憲』に抵触している場合もあったこと、そしてその拠点となっていたのがコレジオであったことなどを指摘している。

第七章「聖衣をまとった戦士たち」では、イエズス会と軍事力の関係が論じられている。日本イエズス会が日本への軍事力行使を計画していた事実に対し、これまでの研究ではポルトガルの海外征服事業の一環という点が強調されていた。それに対し著者は、イエズス会がポルトガルの軍事力と一体化する過程を重視している。イエズス会は日本国内での戦乱によって居所を転々とする状態にあり、経済的にも苦しい状態にあった。その対策として、同会を保護してくれるキリスト教徒領主に対して

武器・資金の援助を行なっていたが、それも同会の置かれた状況を改善するには至らなかった。そこでイエズス会は、スコラ正当戦争理論でいう「自衛戦争」理論にのっとり、長崎の軍事要塞化をはじめとした自衛の道を選択することとなる。自衛の方針を打ち出した後のイエズス会は、軍事力増強のためにポルトガルと一体感を強めていき、さらに一五八七年の豊臣秀吉による宣教師追放令によって、それへの対応のための軍事規模の拡大＝ポルトガルとの一体化が決定的となった。すなわち、日本に対するイエズス会とポルトガル・スペインとの軍事的つながりは、当初は薄かったものが、同会が自衛のため「他力本願」から「自力本願」へと方針を転換することにより「段階的にその度合いを深め」ていったのであり、「イベリア国家の海外征服事業の一翼」に一元化すべきではない、と著者は指摘している。

以上、極めて簡単ながら、本書所収の各章の要約を試みた。本書は、「プロローグ」「あとがき」に示されているように、考察対象を一国に限らずにインド・日本等の諸国を広く取り扱っており、さらに史料を中心に据えて実証的に考察していることが特徴である。また、著者はかつてヴァリニャーノの著作『東インド巡察記』の翻訳を手がけているが（平凡社、二〇〇五年）、本書もまた多くの一次史料にあたった上で執筆されている。当然多大な労力を要したものと推察されるが、本書が多くの事実を明らかにすることができたのは、やはりかかる姿勢によるものが大きいであろう。

それでは、本書を一読した上で若干気になった部分を以下に述べることで、書評の責を果たすこととしたい。実のところ、評者は同時代の日本史を専攻としているものの、イエズス会に関する研究史に対してあまりにも浅学であり、本書を研究史上に正当に位置付けるには力量が不足している。しかしそれゆえに、本書が専門家以外にも理解しやすく記述されていることを実感することができた。その理由には、章の構成を編年的に分けるのではなく、項目ごとに実態を追及することに徹していることが挙げられるであろう。ただ、その反面、個々の項目の歴史的展開が、やや不透明となってしまっている点がみられる。例えば、第四章で論じられた三地区

は、一五八七年の秀吉による宣教師追放令以後には豊後地区の消滅・下地区の明確性の低下などを招いたとされる（一一五頁）。だが、第七章によれば、秀吉による長崎収公後である一五八九年にもイエズス会には軍事要塞の建設を求める意見が存在していたことが明らかであり（二二七頁）、同会は下地区への対策の必要性を感じていたとみられる。したがって、経済的にも避難所としても重要であったとされる下地区・長崎の位置付けが、宣教師追放令以後にどのように変化したのかを、対日布教戦略への影響という観点からもう少し詳細に考察すべきであったのではないだろうか。

また、第五章の適応主義政策であるが、既述のように、著者はヴァリニャーノ以前の事例を発掘することにより、彼の発案を重視してきた先行研究に批判を加えた。この指摘が持つ研究史上の意義は少なからざるものがあると思われるが、本章で挙げられた適応主義の事例にはやはりヴァリニャーノ以後のものが多いことに留意する必要があろう。適応主義政策の展開過程におけるヴァリニャーノの存在に、いかなる評価が与えられるか言及すべきであったと思われる。それによって、世界戦略の一環として各地で用いられていた適応主義政策の実像が、より具体的に明らかになるのではないだろうか。この点、適応主義政策に対し、かかる論点が生じたこと自体が本書の意義の一つであるともいえよう。

なお、第七章では、日本イエズス会の軍事的「自立」の画期が、「時期的に明確にすることは困難」ながらも一つの目処として一五八〇年前後と比定されており（二一八頁）、そこでは「この軍事的自立は、『（中略）征服による以外に日本教界を前進させる方策はないからである』との強硬な主張がなされるまでエスカレートするにいたった」と述べられている（二三〇頁）。しかし、その「強硬な主張」の出典は一五七九年となっており（二七四頁注（79））、この年代が正しいのであれば、これはエスカレートした末の主張というよりも、軍事的「自立」への転換期の意見とすべきであろう。評者は原史料を確認しえていないが、同史料を一五九七年のものとする先行研究もあることから（高瀬弘一郎「キリシタン宣教師の軍事計画」『キリシタン時代の研究』岩波書

店、一九七七年、一二〇頁)、おそらく誤記ではないかと思われる。

以上、内容の紹介とそれに対する若干の見解を述べた。既述のように評者はこの分野に関する理解が浅いため、書評というよりも単に感想を述べることに終始してしまっており、また著者の意図と外れた誤読も多くあることと思われるが、なにとぞご容赦いただきたい。近年、日本史の分野では、国内のみならず視点を広く持って検討することが必要とされている。繰り返しになるが、その意味で本書は、日本史特に中・近世移行期の研究にとっても、貴重な成果となっているといえるだろう。本書の出版により、今後、当該研究がより一層の発展を遂げることを期待したい。